SLAVISTIKA XIX (2003)

歪んだ鏡の言語

鈴 木 玲 子

1.

2002 年 10 月 23 日午後 9 時過ぎ，モスクワ市メリニコフ通りにある国営ベアリング工場文化宮殿で，ロシア初のミュージカルとして注目されていた『ノルド・オスト』の上演中，武装グループが乱入し，1000 名近い人質を捕って立てこもった。ほどなく犯人がチェチェン武装グループの兵士たちであることが判明する。この衝撃のニュースは直ちに各種報道機関を通じて世界中に伝えられた。前年 9 月 11 日アメリカで起きたテロ事件の記憶がまだ生々しい中で起きたこの劇場占拠事件に，ロシアはもとより世界全土が震撼する。この事件は 10 月 26 日午前 5 時，ロシア連邦保安局のテロ対策特殊部隊「アルファ」と「ヴィムペル」の人質解放作戦開始によって幕を閉じる。男性 32 名と女性 18 名から成る犯人グループは，逮捕された 3 名を除き全員死亡。人質の犠牲者数は 129 名にのぼった。

10 月 23 日。この日ミュージカル『ノルド・オスト』を一人の女性ジャーナリストが観劇していた。彼女は他の観客とともに，野戦司令官バラーエフが率いるチェチェン人武装グループが占拠した劇場内で，人質の一人となる。そして事件終結約 2 ヶ月後，悪夢のような 56 時間は，『「ノルド・オスト」――人質の眼から』 «НОРД-ОСТ Глазами заложницы» としてまとめられ，「ヴァグリウス」社から出版された。これは出版数日後には早くも回想録・伝記部門のトップ 10 の中に入るベスト・セラー本となり，「コムソモリスカヤ・プラヴダ」誌，「イズヴェスチア」誌などの主要な新聞並びにＮＴＶ局，ＴＶＳ局などのテレビ局の番組でも紹介された。

『「ノルド・オスト」――人質の眼から』は，人質となったタチアーナ・ポポーワが劇場内での体験をつづった手記の部分と，様々な報道機関を通じて報道された 56 時間の報道記事を収集，列挙した部分という 2 部構成形式となっている。

「ヴァグリウス」社からの刊行の後約 5 ヶ月後，ポポーワの『「ノルド・オスト」――人質の眼から』は，同様の構成で，若干の手直しが加えられたフル・バージョン版として，今度は「現代経済・法律」社から出版された。

この二冊に含まれているポポーワ記者の手記を比較すると興味深い点が見えてくる。それは，テロリスト達の描写に際して使用されている言語の変化だ。

本稿では中でも，「ある時私は一人の坊やに目を止めた。」Однажды я обратила внимание

на *парнишку*...[1] という一文が，フル・バージョン版で「ある時私は一人の若者に目を止めた。」Однажды я обратила внимание на *парня*...[2] となっている点に注目し，主観的評価の接尾辞という観点からその変化が何を意味するのか，またそれを通して主観的評価の接尾辞（特に指小形・表愛形）がロシア語においてどのような機能を果たしているのかを考えたい。

2.

そもそも主観的評価の接尾辞 суффиксы субъективных оценок とは何か。これはその名の示すとおり，話者の，対象に対する主観的な評価が込められている接尾辞のことである。

それでは，この主観的評価の接尾辞という語の中の“主観的な評価”とは何を意味するのか。おそらくは“主観的な評価”を“感情”という語に置き換えて考えた方が，より理解しやすいだろう。ヴォレクは，元来“感情的”な要素と“評価的”な要素は，前者が実際面に則した経験的な性格を持つのに対して，後者はより観念的な性質を持つものであるという点にその違いあるが，多くの場合この二つの要素は一緒に現れ，共存する為，その境は極めて曖昧になっていると説明している。そして「人間のコミュニケーションの一手段としての言語は，人間がその感情を伝達する可能性を持つものである。この感情伝達という最終目的に到達する為に，言語は特別なコード（記号）を作り出した[3]」とし，主観的評価の接尾辞は，音声・音韻論，形態論，語彙といった，あらゆる言語レベルにおいて多様に存在する話者の感情表現の為の，コードの一つとなっていることに触れている。

このコードは，「感情の刺激を引き起こす部分」（語幹）と，「感情を表現する部分」（接尾辞）との結合によって成り，指小，表愛，指大，卑称などを表現する[4]。

そうした主観的評価の接尾辞，そしてその中でも最も特徴的である指小及び表愛の接尾辞と語幹との関係を，非常に明瞭に説明しているのがアクサーコフの以下の一文である。「対象を愛しいものと表現したい時，また親しい関係であることを表したい時，その対象の上に恰も縮小鏡の様なものがかけられ，その対象は小さくなり愛しいものとなる。[5]」

縮小鏡によって縮小された対象は，話者の，その対象に対する愛しさを表すだけではない。話者と対象との様々な関係，例えば同情，アイロニー，軽蔑，憎悪など雑多な，そし

---

1 *Попова, Т.* НОРД-ОСТ глазами заложницы. М.: Вагриус, 2002. С.17.

2 *Попова, Т.* НОРД-ОСТ глазами заложницы. М.: Современная экономика и право, 2003. С.25.

3 B. Volek, “Emotive Signs in Language and Semantic Functioning of Derived Nouns in Russian,” *Linguistic & Literary Studies in Eastern Europe* 24 (1987), p.35.

4 Ibid. p.30.

5 *Виноградова В.Н.* Стилистический аспект русского словообразования. М.: Наука, 1984. С.80-85.

て相反する感情或いは評価の連なりがそれによって表現される。この，指小形の接尾辞が表現しうる多様な側面を，ヴィノグラードワはそれぞれに例を挙げながら，次の様に列挙している：

a) 感情的なグラデーションを含まず，単に“縮小”や“小ささ”を表すための使用

Метель с небольшим морозцем, где-то чуть пониже нуля. (Б. Рымарь «Переправа»)
ちょっとした寒さを伴う吹雪，摂氏零度を少し下回る

b) 指小形の接尾辞は“逆の誇張”，或いは緩叙法を表現するために使用されることがある。この時，通常それを際立たせるイントネーションの変化が伴う。

Зорин: Ничего, ничего — построим городишко! (А. Арбузов «Город на заре»)
Z:「大丈夫，大丈夫，（立派な）街を造るさ！」

この用法は，感嘆，尊敬，アイロニー，懐疑など，多様な感情を表現することが出来るが，基本的には肯定的な場面に使われることが多い。またこの用法の場合，そこで使用されている指小形とは反する意味合いを持つ文章の本意を示す語が，どこかに埋め込まれていることが多い。

Под водой монтировали кабели. То работенка потруднее была. (В. Овечкин «Пусть это сбудется»)
水中に潜ってケーブルを修理した。ありゃ大変な仕事だったよ。

c) 指小形接尾辞は，既に軽蔑のニュアンスを持つ語を更に強調するものとして使用されることもある。

Нам с тобой не к лицу перед различной гнильцой капитулировать. (А. Арбузов «Нас где-то ждут»)
いろんなくだらないものに屈伏するのは，俺達の柄じゃない。

d) 指小形接尾辞を付随することにより，本来の意味としては感情を含まない中立の単語，或いは肯定的な意味を持つ単語からも，アイロニーなど否定的な色彩を引き出すことができる。

Порядочки у них тут. Магазин закрытый, а Татьяну сразу пропустили. (С. Гапсовский «Крылья красные»)
たいした規則だ。店は閉まっているのにタチアーナはすぐに通してもらった。

e) とりわけ感情表現の度合いが強いのは，指小形接尾辞の付随した名詞と同じく指小形接尾辞の付随した形容詞が並行使用されている時である。

Вдруг этаким шустрым жуком, отталкивая все другие мысли, появлялась грязненькая и подленькая мыслишка о том, что до него у Наташи были мужчины. (Евг. Кутузов «Не стой у порога»)
突然まるで敏捷な虫のように，他の全ての考えを押しのけ，彼の前にもナターシャには男がいたのだ，という汚い，そして卑劣な考えが過るのだった。

f) 指小及び表愛の意味は，指小形接尾辞が付随される名詞の本来の意味とも関係してくる。

Озябли? Замерзла, сердечко мое?... Счастьице мое золотое... (А. Арбузов «Город на заре»)
寒いですか？凍えちゃった？愛しい人，大事な人。

しかし，同じ名詞でもテキストの内容によっては表愛の意味合いが強い指小を示すこともあれば，卑称を含む指小を示すこともある。

Анна Петровна: Если б отец тебя видел...
Люся: Он был бы рад?
Анна Петровна: Поглядел бы, какой ты стала человечек, он счастлив был бы.
(Ф. Кнорре «Сестры»)
A. P.「もしもお父さんがあなたを見たら…」
L.「お父さん喜んでいたと思う？」
A. P.「あなたがどんな人間になったかを見たら，幸せになったでしょうね。」

Мне самому стало казаться, что я уже не кругленький робкий человечек, а парень по меньшей мере в метр восемьдесят. (ЛГ, 29.VIII.1969)
僕自身，自分がもはや丸っこい，おどおどした人間ではなく，少なくとも身長 180 c mはある青年であるかのように思えてきた。

То он с злобой думал о том, с каким бы удовольствием он увидел испуг этого маленького, слабого и гордого человечка под его пистолетом. (Л. Толстой «Война и мир»)
或いは彼は憎しみを込めて，この小さな弱々しい，そして高慢な男が彼のピストルの下で驚愕する様子を，とてつもない喜びをもって眺めたであろうことを考えていた。

g) 当然，指小形接尾辞の付随された語が表現するカラーには，言語学外の要素，社会的な要素も影響している。

h) 指小形，表愛の接尾辞は，人間の性格やその人の特質を表現するために使用される場合もある。その場合それは，必要以上の丁寧さや，追従を表す。

Кузьма встречал и провожал своего начальника как любимую девушку.
— Позвольте вашу сумочку, ваш портфельчик. (Б. Егоров «Благодарный Кузьма»)
クジマは，まるで愛しい女性を見送るかのように自分の上司を見送った。
「バックをお持ちしましょうか，カバンをお持ちしましょうか。」

特にこの性格的機能が顕著に表出するのは，指小形接尾辞が指小の意味を持たずに，純粋に感情表現として使用されている場合である。

— Пардончик, Виктор Павлович, пардончик! — запротестовал Добрых. (Евг. Кутузов «Не стой на пороге»)
「ちょっと待った，ヴィクトル・パウロヴィッチ，ちょっと待った！」と，ドブリフは抗議し始めた。

i) 話者が，自分自身に関すること，或いは自分に属するものに対して卑称の意味合いが強い指小形を使う場合，謙遜や礼儀正しさ，丁寧さを示すこともある。

— Здравствуйте — не очень приветливо сказал мужик. — Заезжай, я покажу, куда ставить. Барахла-то много?
— Откуда!... Одежонка кой-какая да постелищка. (В. Шукшин «Из детства Ивана Попова»)
「どうも。」男はちょっと無愛想に言った。「寄ったらいい。どこに置いたらいいか見せるから。

荷物は多いのか？」

「そんなことないよ。ちょっとした洋服と寝具だけさ。」

j) 指小形の接尾辞はとりわけサービス業（医者も含む）の人によって頻繁に使用されることが多い。これは一種のエチケット表現である。

Приятный блондин хлопотал, уставляя столик кой-какой закускою, говорил ласково, огурцы назвал огурчики, икру — икоркой. (М. Булгаков «Театральный роман»)

気持ちの良い金髪のボーイがついていた。彼はオードブルでテーブルを飾りながら優しく話し，キュウリのことをきゅうり，キャビアのことをきゃびあと称した。

k) 肯定的な役割を果たす主人公たちは，通常自分で指小形表現を使うことはないし，その使用に関しても否定的である場合が多い。

Седых: Не распить ли нам по рюмашечке красного?

Галина: Рюмашечка, ручечка ... брр! (З. Аграненко «Ключи от дома»)

S.「ちっちゃないっぱいずつ赤いのをやらないか？」

G.「ちっちゃな一杯，お手て，ああ嫌だ，ぶるぶる！」

l) 否定的な感情を表現するために指小及び表愛の接尾辞がついた語彙を，性格的な機能と結びつけて使用する場合もある。

Орел: Хотелось все же заметить, что наряду с успехами наметились оттеночки и нежелательного свойства. (А. Арбузов «Нас где-то ждут...»)

O.「それでも，成功と並行してあまり好ましくない特性の陰りが見えてきたことを指摘したい。」

m) 名詞の指小形の付随した形を，指小形の付随していない原形と対比させたり，対立させたりすることで，感情や考えを表現していくこともある。

Такого не было еще никогда. Волна, шквал, ураган дискусий. Рождающиеся чуть ли не каждый день «платформы» и платформочки. (Е. Драбкина «Зимний перевал»)

議論の波，突風，嵐。ほとんど毎日の様に生まれる「プラットホーム」とちっちゃな「プラットホーム」。

n)指大形の接尾辞は会話文の中で，ある種の感情を伴った“大きさ”や“量の多さ”を表すために使用されることがある。

Катя: У вас тесно?

Андрей: У нас?! Да что вы! Вон какая квортирища. (В. Розов «В добрый час!»)

K.「あなたの所は狭いですか？」

A.「わたし達の所？とんでもない！巨大なアパートですよ。」

o)性質をあらわす名詞は，指大形をとることによってその性質が強調され，最高級（“良い”性質だったら“とても良い”ものとなるし，“悪い”性質だったら“非常に悪い”ものになるということを指す）となる。

Ох, и красотища вокруг! (В. Розов «Вечно живые»)

何という美しさなんだろう！

p)敵意や怒りをあらわすために，指大形接尾辞を固有名詞に付加することもある。また，指小及び表愛の接尾辞が付いた呼び名から指大形の付いたものへと変わる時は，感情が変化したことをあらわす。

Бригадир начал подбираться к жеребцу и вкрадчиво, тихо уговаривать его.

— Шатун, ну что ты, Шатун, Шатунчик ... у ... Шатунище! — Бригадир с матюгом выскочил из стойла, так как жеребец повернулся к нему задом. (В. Белов «Плотницкие рассказы»)

取り入るように静かに話しかけながら，作業長はそっと雄馬の所に近づいていった。「シャトゥン，ほら，シャトゥン，シャトゥンちゃん…うっ…シャトゥンの野郎め！」作業長は雄馬が彼に尻を向けたので，罵りながら厩舎から飛び出した。

また，指小及び表愛の形態によって表現される感情のニュアンスの多様性と，その変質自在な性質についてはグリムが次の様に描写している。「指小の形態は，単に少ないもの，或いは小さなものに関する理解を表現するばかりでなく，愛しいもの，優しいものに関する気持ちをも表現するものである。それ故，わたし達は偉大なもの，高尚なもの，神聖なもの，更には恐ろしいものに対しても，素直にそうしたものに近づき，その恩恵にあずかるために指小形を使う。とりわけ最後の種のものに関する単語では，当初の縮小が時とともに消滅し，感情を持たないものとなる。それ故フランス語の soleil“太陽”や，スラブ語の солнце“太陽”は，それぞれ指小形の語であるが，現在ではその指小形の使用は感

じられないのである。」[1]

本来は指小の意味合いを持っていたものが，時とともにその「指小」のニュアンスを失い，独自の単語となる過程を，女性が使用する言語との関連性から考える方法もある。

コレソフは，女性の会話文体の特徴として，男性の会話文体に比べ代名詞，小詞，否定などの所謂より感情を注ぎ込みやすい副次的な語の使用が多いのに対して，男性の会話文体の特徴としては，直接的な方法で概念を体現することができる名詞の使用が中心となっている[2]，と述べている。もっとも指小形の使用を女性が使用する言語の典型的な特徴であると決めつけることには，ゼムスカヤ達が異を唱えている[3]。指小形が女性特有の言語特徴なのではなく，指小形が使用される確率が高い状況というものがあり，その状況に関わっているのが男性よりも女性の方が多い為，指小形が女性の使用言語の特徴であるかのような印象を与える，というのがゼムスカヤ達の主張である。その代表的な例が子供に対して話しかける時の言語だ。

指小形は大人が子供に対して使用する言語の中で最も頻繁に使われるものである。それ故，子供を育て，子供と接する機会が多い女性の方が，男性よりも指小形を使う機会も多い。子供に対して使用される言語では，指小形が使われている対象自体が指小，或いは表愛の対象とはおよそ無縁である時でも指小形が使われることがある。また同様のことが家畜動物（特に小さなもの）に対して使われる言語についても言える。一方，指小及び表愛形を皮肉，もしくは自嘲のニュアンスをあらわす用法で用いるのは，どちらかというと男性に特徴的だとゼムスカヤ達は述べている[4]。

また指小形の中には，時の流れの中で指小形が付随された本来の意味を完全に失い，本来の語幹とは異なる意味合いを持つ新しい単語となるものもある（例えば，вода「水」とводка「アルコール飲料であるウォッカ」）。こうした単語は独自のものとして把握され，従って単語の一部となった接尾辞とは別に，新たに主観的評価の接尾辞をとることになる。“感情を表現する部分”である指小形を始めとする主観的評価の接尾辞が，“感情の刺激を引き起こす部分”である名詞の語幹に付随されていく過程をヴィノグラドフは次の様に説明している。

(1)主観的評価の接尾辞がついていない語

(2)この語の語幹＋指小・表愛の接尾辞（第一級の評価）

---

1 *Виноградов В.В.* Русский язык. М.: Высшая школа, 1972. С.98.

2 *Колесов В.В.* Язык города. М.: Высшая школа, 1991. С.101.

3 *Земская Е.А., Китайгородская М.А., Розанова Н.Н.* Особенности мужской и женской речи // Русский язык в его функционировании. М.: Наука, 1993. С.123.

4 Там же. С.125.

(3)上述した指小形の語幹＋表愛の接尾辞（第二級）[1]

この第二級評価が示すのは，対象の“指小”ではなく，話者の対象に対する肯定，もしくは否定の“感情”だ。

“感情を表現する部分”としての指小形接尾辞。その接尾辞が表しているのが果たして肯定的な感情なのか，或いは否定的な感情なのか，もしくは“感情”ではなく“大きさ”の変化を表しているだけなのか，更には“感情”を表すものでもなければ“大きさ”を表すものでもない，所謂“中立”のニュアンスを表すものなのか。ヴォレクも述べている様に，指小形の接尾辞だけを語幹やテキストから切り離して考えるのは不可能であるし，言語外的状況もその意味や使用を決定する上で極めて重要である[2]。

本稿で取り上げた二冊の『「ノルド・オスト」――人質の眼から』における指小形の使用は，とりわけこの言語外的状況の重要性を最も端的に示している典型的な例であると言えるだろう。確かに著者がテロリストの若者に対して使用した“парнишка”という語の主観的評価の接尾辞には，その若者に対する否定的なものでしかないとは必ずしも言い切れない複雑に入り混じった感情的な背景も，またその若者が 14 歳くらいに見えたという“大きさ”を尺度とした要因も含まれている。語幹との組み合わせ，またその前後のテキストの流れにおいて，ここでの主観的評価の接尾辞は決して不自然ではない。所謂ごく正常な修辞的用法であると言えるだろう。

だが，それにも関わらずポポーワは「現代経済・法律」社の改訂版の中でその指小形を取り除いている。それは何故か。

結論から先に述べるとそれは，聞き手（もしくは読み手）に解釈を強制する発話体系の基盤において，あらゆるその自然に見える根拠にも関わらず，尚且つ，ここでの指小形の使用が二重の意味で“異常”であるからである。

3.

それでは，言語における“異常”，もしくは“異常の言語”とは何か。

言語は周知のとおり，“表わすもの”と“表わされるもの”との結合だ。ソシュールは言語を「概念を表わす記号の体系である」と定義した。通常この“表わすもの”と“表わされるもの”との間にずれは生じない。それが正常の状態であるといえよう。一方“表わすもの”と“表わされるもの”との間に意味上のずれが発生した場合，それは正常ではない状態を示す。また“表わすもの”と“表わされる”ものとの間に意味上のずれが生じな

---

1 *Виноградов В.В.* Русский язык. С.99.

2 B.Volek, “Emotive Signs in Language and Semantic Functioning of Derived Nouns in Russian,” p.56.

くても，発話者と聞き手，更には社会組織を構成する一員としての発話者とその状況のずれ，そしてその発話者が発信する発話を受け取る聞き手との間に明白なずれが発生する場合，その発話は“異常”の範疇に入るものであると考えられる。要するに記号としての言語を社会，生理機能，心理といった色々な観点から考察した中から浮かび上がる歪み，その中に“異常”（もしくは“病理”）に繋がる萌芽が存在する。

レオンティエフはその『言語心理学の基礎』の中でこの“異常”аномалия を，“病理”патология という語に投影させ，言語病理の表出形態を次の5つに分類した[1]。

1. 病理精神言語学上の障害，即ち個人の病理，意識そして精神機能と結びついている発話障害（例えば精神分裂病など）
2. 脳の損傷と密接なつながりを持つ発話障害（例えば失語症）
3. 知覚障害（例えば聾唖者）
4. 知的障害者
5. 運動機能障害と関連を持つ発話障害（例えばどもり）

本稿ではこの5つの分類の中でも，とりわけ最初の病理精神言語学上の障害と結びついている言語病理の表出形態に焦点を当てて考えてみたい。

精神疾患，或いは心理的な歪みと発話との結びつきは，潜在意識の表出としての役割を“言い間違え”という現象に見たフロイトや，ある特定の発話様式を精神分裂症の兆候ととらえたクレペリンをはじめとしてそれぞれ精神医学，心理学，そして言語学の観点から早くから注目されてきた。現在では，幾つかの精神病において言語が，診断を下す際の要の一つともなっている。以下レオンティエフの『言語心理学の基礎』からその例を挙げてみよう[2]。

例えば，梅毒からくる精神障害の一形態である進行性麻痺は，不明瞭な発音といった言語特徴を示す。またそれが更に進行すると，転義が理解出来なくなり，発話のイントネーションが極めて単調になる。

コルサコフ症候群は，その記憶力の低下によって，とりわけ言い換えの形態，つまり本来使用されなければいけない語の代わりに不適当な語を使用するという形で，発話にも痕跡をとどめる。

またアルツハイマー症の場合，発話は目立ってステレオタイプ的になり，同一の語彙，同一の構文の多用が目立ち，それが同一のイントネーションによって発話されると言われている。

マニアックな憂鬱症の言語特徴は，「電報口調」であり，これは時として互いにつなが

---

1 *Леонтьев А.А.* Основы психолингвистики. М.: Смысл, 1999. С.232.

2 Там же. С.232.

りを持たない語の羅列となって表れる。また話しが頻繁に飛んだり，文を最後まで言い切らないで目に入った新しいものに話しが流れる，というのもこの病気の特徴だ。そして，音からくる連想傾向が顕著にあり，そこから韻を踏んだ語の多用が発話において見られる。

一方精神分裂症の発話特徴としてまず挙げられるのは，議論性と詳細性である。精神分裂症の患者は議論好きであり，その発話は細部に渡る詳細な説明に固執する傾向を持つ。具体的な意味は抽象的な意味を持つ語に取って代わられ，またその逆も頻繁に見られる。また文法的には正確さを保持しながら，意味上のつながりを持たない語や構文の羅列も顕著である。発音上の特徴としては，単調さ，もしくは文の最も重要な部分ではなく，二次的な意味しか持たない部分でイントネーションを強調する傾向が挙げられる。対話相手が使用した語を繰り返したり，同一の語彙や表現を無意味に叫んだりする傾向もある。

こうした病と言語という関係の中でも，最も明確な輪郭を持ち，臨床においても診断を下す上での基準とされているのが，癲癇患者の言語特徴であるとされている。癲癇の場合，ゆっくりとした，不明瞭で“もつれる”様な発話の他，繰り返しの傾向，ステレオタイプ的な発話，まわりくどさ，といった特徴と並んで「指小形の形態をとる語彙の多用」が必ず指摘される。

ロシア語における指小形と癲癇との関連性に関しては，言語心理学者ゼイガルニックの一派を中心として特にブラティスが興味深い研究を行っている。そしてその結果として，癲癇患者の指小形多用が実証されたばかりでなく，とりわけその傾向が著しいのが小児癲癇の患者であるところから，指小形多用の理由が，ある種の“補填”である，というところまで仮説がたてられている。即ち，発作が起こった時に自分が周囲に恐怖などの否定的な感情を与えるのを感じとった子供が，自分を取り巻く子供社会において“自分は決して恐ろしい者ではない”ということをアピールしようとして，母性や愛情，優しさといった，所謂子供にとっては“善”そのものの象徴である指小形や表愛形を使用することによって恐怖とは反対の感情を補填し，発作のために途切れた人間関係を修復しようとするところからこの指小形の乱用が見られるというのである。この場合指小形は，本稿の 2.で挙げた通常の使用の規範から大きくはずれた形で使われる。

通常の使用基準からずれた形で使用される癲癇患者による指小形の用例としてカレワは，殺虫除去業社から派遣された四十代の女性が仕事をするにあたって“//всех тараканчиков поубиваем ядичком//”（「ごきぶり全部を毒で殺してしまいましょう」）という発話の記録を挙げている。

主観的評価の接尾辞は，語形成の次元で語幹と語尾が文法的に正確に結合していれば基本的にはどのような名詞に対して適用されていてもおかしくない。従って“ゴキブリちゃん”，“毒ちゃん”と言っても勿論問題はないわけだが，通常指小形や表愛形と結びついた形で使われることのない語の多用は，そこに異常の萌芽が潜むことを表わす。

指小形はこうした病理の次元での異常だけではなく，実に様々な状況において歪みの存在を示唆する。次の例などもその内の一つであろう。

“//да вот, картошечка, курочка, правдо сегодня рыбенька//”（「そうですね，おいもに，チキンに，もっとも今日は魚ですけど…」）。これは病人食の改善に動き出したカリーニングラード刑務所に服役する食事係りの受刑者の三十代男性が，「通常どんなものが食事に出るのですか？」というインタビュアーの質問に答えている時のテレビ・インタビュー（2001 年 10 月 18 日 TB6 放映）での模様である。画面には大きな器に無造作に山積みされたマッシュドポテトと，おそらくは魚のソテーであろうと思われるかなり大きな固まりが映し出されており，明らかにこの男性の発話の中で使用されている指小形 картошка（じゃがいも）— картошечка, курица（鶏）— курочка 並びに表愛形 рыба（魚）— рыбенька が，彼の潜在意識の中で指小形使用本来の目的である「指小」即ち「小ささを表す」というものとは別の基準で選択され，使用されているのが判る。これもまた殺虫除去業社派遣の女性の発話の様に，ある種の歪みを感じさせるものである。

しかし，もしもこの発話が受刑者のものではなく，例えばとある幼稚園か保育園の先生のものであったとしたらどうか。指小形，表愛形が子供に対して用いられることが多いところから，おそらくその場合は実に自然な形で受け入れられていたはずである。また，前例の癲癇患者の発話にしても，それが例えばシュールレアリズムや表現主義といった明らかな文学的な効果を考慮に入れた環境で用いられていたとしたら，受け止められ方は変わっていたはずである。

4.

ポポーワが「ヴァグリウス」社版の『ノルド・オスト』の中で，テロリストの若者を描写する際に用いた指小形は，前述した通り，その用法に特別不自然なところがなかったにも係らず外されている。その理由は，парнишка という語が，それ自体としてある種の歪み，“異常”を具現化しているからである。

56 時間を極限状況の中で 50 名のテロリストとともに過ごした人質の多くには，早い時期から「ストックホルム・シンドローム」（或いは「人質症候群」）の疑いが認めらると指摘されていた。人質が，自らを捕らえた犯人に対して同情的となり，心理的な同調や共鳴を覚える「ストックホルム・シンドローム」。自らを監禁しているテロリストの立場を哀れみ，その思考に理解を指し，その論理を受け入れる人々。例え人質の中から犠牲者が出たとしても，犯人が遂行しようとしている高尚な理想のためにはそれも仕方が無いとする不思議な諦め。テロリストの一青年を描写する主観的評価の接尾辞は，メリニコフ通りの文化宮殿内での「ストックホルム・シンドローム」の蔓延の仕方がかなり早く，そして広

範囲に渡っていたことを暗示する。犯行グループと，人質との間に存在していた垣根。或いはより正確に言えば存在していなければならない垣根。その上に指小形によって彩られた主観を重ねることは，即ちそうした無機質的な垣根を取り除き，被害者と被疑者との間に存在する距離を縮めることにつながり，そこに「ストックホルム・シンドローム」の片鱗，もしくはそれに極めて近い感情のグラデーションを見てとることが出来る。

他の元人質達と同様，事件後ポポーワもまた深刻な精神的トラウマに悩まされ，今日にいたるまで心理カウンセラーの助けを借りているという。当然，こうした所謂心理上のリハビリの過程において「ストックホルム・シンドローム」的傾向が指摘され，重点的な治療の対象となったに違いない。それが時間を経た後，修正を施された「現代経済・法律」社版の『ノルド・オスト』にも反映され，парнишка という語が парень という語に変化した経緯となっているのだろう。

また，より社会的な要因も指摘出来るに違いない。129 人もの一般市民の命を奪ったモスクワ市中心での劇場占拠事件は，プーチン大統領政権下のロシアに大きな傷跡を残した。それは，2001 年 9 月に勃発した同時多発テロ事件後アメリカ国民を満たした反テロ感情に匹敵する程根強いテロリストというものに対する憎悪が，ロシアの人々，とりわけモスクワ市民の間に蔓延している。その善し悪しは別としてことテロリズムに関しては「罪を憎んで人を憎まず」という言葉をはるかに超えた感情が今のモスクワでは主流となっている。テロリストを人間と見ること自体，社会的に危険なものであるとする風潮すら存在する。

そうした中でポポーワは自らを社会構成要員の一人として認識し，自らの感情を付与することによってテロリストという無機質な絶対悪的存在に顔を与え，人間として蘇らせたことに気が付いたのだろう。

レオンティエフが指摘しているように，言語とは基本的に社会的なものであり，社会を構成する要員が，その規範からそれた記号としての言語を使用した時，それは“異常”の範疇に入るものとなる。

「ヴァグリウス」社版と「現代経済・法律」社版の『ノルド・オスト』における主観的評価の接尾辞の使用は，語形成レベルでの指小形という接尾辞が個の内面の歪みを示唆する鏡としての役割を果すのと同時に，外界と個との間に存在する歪みを暗示する鏡としての役割をも担うものであることを端的に示していると言えよう。

Язык кривого зеркала

СУДЗУКИ Рейко

Русский язык чрезвычайно богат суффиксами субъективных оценок. Используя уменьшительные или увеличительные суффиксы можно не только уменьшать или увеличивать размер предмета, но и придавать словам, которые, в сущности, не обладают никакой эмоциональной окраской и являются сугубо нейтральными, различные смысловые оттенки.

В своей работе В.Н. Виноградова очень четко описывает многочисленные варианты выразительности (например, ласковость, презрительность, восхищение, одобрение, неодобрение, уважение, иронию, скептицизм и т.д.), которые достигаются использованием уменьшительных или ласкательных суффиксов.

Иногда уменьшительные суффиксы могут служить показательным сигналом психического заболевания. Во многих учебниках по психиатрии и патопсихологии указывается, что наряду с другими особенностями, «обилие слов в уменьшительной форме» является характерностью речи эпилептиков.

То есть, уменьшительные суффиксы являются не только суффиксами «субъективных оценок», но и могут оказаться «объективным критерием» для оценки со стороны. Можно сказать, что суффиксы субъективных оценок отражают мир изнутри и со стороны в кривом зеркале. С этой точки зрения, в данной работе рассматривается одно выражение документальной записи, которая была посвящена шокирующему событию, произошедшему в октябре 2002-го года в Москве.

23-го октября 2002-го года, во дворец культуры на улице Мельникова, где проходил первый российский мюзикл «Норд-Ост», вторглись вооруженные чеченские боевики и захватили в заложники более 700 человек. Спустя два месяца, издательство «Вагриус» выпустило книгу «НОРД-ОСТ Глазами заложницы», описывающую изнутри это трагическое событие. Как можно догадаться по заголовку, автором этой книги является бывшая заложница, которая провела 56 кошмарных часов внутри захваченного террористами театра. Книга «НОРД-ОСТ Глазами заложницы», написанная Татьяной Поповой хорошо продавалась, и сразу же после ее опубликования была зарегистрирована как одна из самых продаваемых книг. Затем, спустя еще несколько месяцев, вышла вторая, так называемая полная версия книги «НОРД-ОСТ Глазами заложницы», выпущенная уже издательством «Современная

экономика и право».

Хотя в целом структура была сохранена, в тексте все-таки были сделаны небольшие изменения. Особенно эти поправки заметны в выражениях, описывающих самих террористов. Одним из примеров таких поправок является фраза «Однажды я обратила внимание на *парнишку*...»[1] , которая была изменена на фразу «Однажды я обратила внимание на *парня*...»[2]. Словом «парнишка» был обозначен молодой террорист. Казалось бы совсем несущественное изменение, но то, что автор поменяла слово «парнишка» на просто «парень» объясняет многое.

В данной работе, в попытке определить, почему автор заменила одно слово другим, рассматривается значение уменьшительных суффиксов как кривого зеркала, которое отражает мир особым способом.

---

[1] *Попова, Т.* НОРД-ОСТ Глазами заложницы. М.:Вагриус, 2002. С.17.

[2] *Попова, Т.* НОРД-ОСТ Глазами заложницы. М.:Современная экономика и право, 2003. С.25.